

越谷市増林地区における「新方川」の流路変遷

秦野 秀明

はじめに

越谷市増林地区を流れる一級河川「新方川」は、文政十三年（一八三〇）成立の『新編武蔵風土記稿』⁽¹⁾では「千間堀」と記載され、天保八年（一八三七）十一月『千間堀旧記調書』（大里深野家蔵）⁽²⁾、江戸期「絵図」⁽³⁾では当時葛西用水（逆川）を伏越していた地点⁽⁴⁾より下流部を「下千間堀」と記載されている。この伏越していた地点は旧・大吉村と旧・増林村の境界⁽⁵⁾であり、旧・増林村より下流部の「千間堀」を「下千間堀」とも呼んでいたことが判明する。

その後、大正五年（一九一六）の「新方領耕地整理事業」の竣工後に「新方領堀」と改められ、昭和四十年（一九六五）四月一日には一級河川「新方川」と再び改められた⁽⁶⁾。

越谷市増林地区における「新方川」の流路変遷に関する代表的な先行研究には、発表された順番に紹介すると、

文献①『越谷市史 一通史下』⁽⁷⁾
文献②『越谷ふるさと散歩（下）』⁽⁸⁾

の「2点」がある。

文献①の内容は、次のように要約できる。

④大正十四年に埼玉県議会の可決を経た後、昭和二年に国庫補助を受けて起工し、同八年十一月に竣工した。

竣工に伴い、増林（旧・増森村）の元荒川に落とされていた千間堀は、増林（旧・中島村）の中川に落とされた。

文献②の内容は、『字千間堀旧記調書』（大里深野家蔵）⁽²⁾を
出典として、次のように要約できる。

①元禄十二年（一六九九）前後、千間堀は葛西用水（逆川）を伏越の埋樋で流下してから、増林（旧・増林村）の水田地に落とされていた（「落とす先（流末）」については出典に記載されていない）。

②元禄十二年（一六九九）、千間堀の上流の村々による訴願が行われた。その後、訴願の結果として、千間堀の伏越の埋樋を拡張すると共に、その流末を延長し、増林（旧・花田村）の花田古川に落とされた。

③その後、千間堀の流末をさらに延長し、増林（旧・増森村）の元荒川に落とされた。

筆者は、先行研究である文献①、文献②の内容を踏まえ、二〇一四年十一月、「第46回 越谷市市民文化祭」において、天保八年（一八三七）十一月『字千間堀旧記調書』（大里深野家蔵）⁽²⁾を出典に、新方川（千間堀）の流路変遷について、その「落とし先（流末）」を論点として発表した。

さらに筆者は、翌年の二〇一五年四月二十三日、NPO法人越谷市郷土研究会・「河川史研究倶楽部（現・地誌研究倶楽部）」における「講演会」において、同研究会「会員」の山本泰秀氏の調査による結論を取り入れ、新方川（千間堀）の流路変遷について、同様に、その「落とし先（流末）」を論点として発表した。

以下は、同「講演会」の配布資料として作成した原稿に、大幅に加筆をしたものである。

一 元禄十四年（一七〇一）以前の千間堀の流末

一級河川・新方川⁽⁶⁾の前身である千間堀は、近世前期から用悪水（排水）路として、旧・長宮村（現・さいたま市岩槻区）ほか三十五カ村組合によって管理されていた⁽⁹⁾。

先行研究では、旧・増林村がその流末で、同村の水田地に

「落とされていた」という「ありえない」説明⁽¹⁰⁾であった。

筆者は、二〇一四年二月に行った越谷市増林地区の住民への聞き取り調査⁽¹¹⁾の結果、同地区に存在する「埋堀」を手がかりに、元禄十四年（一七〇一）五月十四日以前の千間堀の流末は、「埋堀」の流路を経て旧・増林村の大落古利根川に「落とされていた」という「新しい仮説」を発表したが、二〇一五年四月二十三日、NPO法人越谷市郷土研究会「会員」の山本泰秀氏の「埋堀」の調査による結論を取り入れて、大落古利根川への「落とし先（流末）」の位置を、「最初の仮説」より直線距離で約93m下流となる、同地区の「ふれあい橋」の上流側約10mの地点に修正して再発表した。

二 旧・増林村の「埋堀」^{うめぼり}

天保八年（一八三七）十一月『字千間堀旧記調書』（大里深野家蔵）⁽²⁾には、千間堀は葛西用水（逆川）を「2ヶ所」で「伏越」していたことが記載されている。

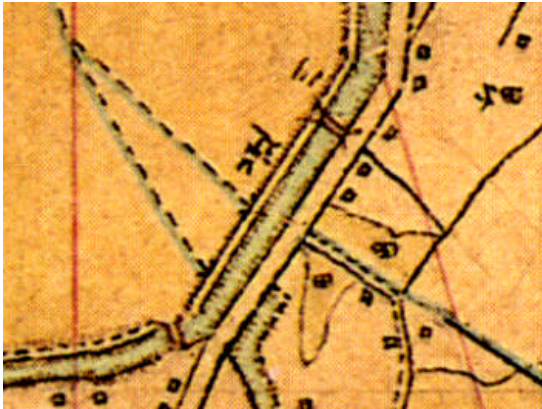
明治十三年（一八八〇）測量の「迅速測図」においても、千間堀は葛西用水（逆川）を「2ヶ所」で「伏越」している流路が、「図1（次頁）」のように作図されている。

①「2ヶ所」の「伏越」のうちの「1ヶ所」の位置は、「現・定使野橋」から葛西用水（逆川）のやや上流側（北東）に作図されている。「伏越」の下流側では、葛西用水（逆川）の左岸に沿うような形で千間堀の流路があり、そのすぐ先において約135度の角度で南南東へ曲がる流路が作図されている。

②「2ヶ所」の「伏越」のうちの「他の1ヶ所」の位置は、「1ヶ所」の「伏越」のさらにやや上流側（北東）に作図されている。千間堀の上流である旧・大吉村において、千間堀から分流する様子も作図されており、「伏越」の下流側では、その流路は葛西用水（逆川）の対岸（南東）である旧・増林村根通地区に向かう流路が作図されている。

NPO法人越谷市郷土研究会「会員」の山本 泰秀氏所蔵の昭和五年（一九二〇）発行の「埼玉縣増林村地番反別入地図」では、葛西用水（逆川）の対岸（南東）である旧・増林村根通地区に向かう流路は、最上流部が接続（分流）していない「途中まで並行した2

「図1」



本の」流路として作図されている。

この上流部が接続（分流）していない「途中まで並行した2本の」流路のうちの「北側」の流路は、山本氏の調査によれば、越谷市増林地区で「埋堀」と呼ばれている悪水（排水）の流路に、ほぼ一致している。

ゆえに、「上流部が接続（分流）していない」点は不明ながら、二〇一四年十一月、「第46回 越谷市市民文化祭」において、筆者が「新しい仮説」を発表した元禄十四年（一七〇一）五月十四日以前の千間堀の「落とし先（流末）」としての「埋堀」の流路を、山本氏の調査により判明していた越谷市増林地区で「埋堀」と呼ばれている悪水（排水）の流路に、大幅に修正、変更することとした。

山本氏の調査による「埋堀」の流路は、既に述べたように、南東側の旧・増林村根通地区に向かった後、現在の越谷市立増林小学校の東で、北東に流路を変え、現在の「ふれあい橋」の上流側10mの地点で、大落古利根川に落とされている。

三 千間堀（下千間堀）の流路変遷

旧・大吉村と旧・増林村境界（5）の葛西用水（逆川）との「伏越」地点から下流の落とし先（流末）まで

元禄十二年（一六九九）以前、旧・大吉村内の葛西用水（逆川）との接続点に、横老間の「伏越埋樋」が式ヶ所^に、設置されていた^{（2）}。千間堀の流末は、後に「埋堀」と云われる流路を経て、大落古利根川に落とされていた。

元禄十四年（一七〇一）五月十四日、旧・大吉村内の式ヶ所^にの「伏越埋樋」を、法四尺五寸、横式間、長二拾二間^{じゅうに}に拡張し、千間堀の流末を変更、延長して、旧・花田村内の花田古川に落とされた^{（2）}。

文政十三年（一八三〇）成立の『新編武蔵風土記稿』の刊行以前には、千間堀の流末を延長して、旧・中島村内の大落古利根川に落とされた。^{（12）}

※ これは、「従来の説^{（7）（8）}」とは異なる「新説^{（12）}」の発表である。

大正五年（一九一六）、旧・大吉村と旧・増林村境界の葛西用水（逆川）との「伏越」地点から上流部である千間堀（上千間堀）において、「新方領耕地整理事業」による改修が竣工した。

昭和八年（一九三三）十一月、「十三河川改修事業」による改修が竣工し、大落古利根川の直道化に伴い廃川となつ

た河道を再利用し、千間堀の流末を延長して、旧・中島村内（当時の旧・増林村）の中川に落とされた^{（7）}。この時の改修を以て、現在の新方川の流路となった。

四 「定使野地区」の流路変遷^{じょうつかいの}

農研機構農業環境変動研究センター「歴史的農業環境閲覧システム」^{（13）}を使用すると、現在の「電子国土基本図」における位置環境と、明治十三年（一八八〇）測量の「迅速測図」における位置環境との比較を、ほぼ正確に行うことが可能である。

また、現在の測量技術を用いて作成した「電子国土基本図」^{（13）}との比較により、明治十三年（一八八〇）当時の測量技術を用いて作成した「迅速測図」における位置環境では、多くの「誤差」が発生している事実も発見することができる。

今回、「歴史的農業環境閲覧システム」^{（13）}を使用して、旧・増林村定使野（現・越谷市花田二丁目・大字増林）地区を照会した結果、

- ① 「定使野橋」から「宮野橋」までの区間
- ② 「新栄橋」から「白鷺橋」北北西約150 mまでの区間^{（14）}

の新方川（千間堀）の流路が、明治十三年（一八八〇）の「迅速測図」の測量時には、それぞれともに、現在の流路から見て「東側」に作図されていることが判明した。

以上の照合の結果から、新方川（千間堀）の流路が著しく異なる地点は、

① 「定使野橋」から「宮野橋」までの区間

② 「新栄橋」から「白鷺橋」北北西約150mまでの区間⁽¹⁴⁾

の「2カ所」のみであるので、流路の位置環境の違いは測量技術の未熟さによる「誤差」ではないと判断した。

昭和三年測図・同五年十二月二十八日発行「二万五千分の一地形図・越ヶ谷」⁽¹⁵⁾では、①と②の区間の新方川（千間堀）の流路は、それぞれともに、すでにほぼ現在の位置に作図されているので、遅くとも昭和三年（一九一八）には、現在の位置へ流路が変更されていたことが判明した。

さらに、『越谷市民俗資料』⁽¹⁶⁾の聞き取り調査では、旧・増林村定使野（現・越谷市花田二丁目・大字増林）地区の住民の証言として、以下のように記載されている。

「昔、梅光院が曲がっていた千間堀をまっすぐにしたという。それほど梅光院の勢力が強かったという話がある」⁽¹⁶⁾

結びにかえて

今回、「三 千間堀（下千間堀）の流路変遷」の章において、

① 「元禄十二年（一六九九）以前」から「昭和八年（一九三三）」までの千間堀の「落とし先（流末）」の流路変遷について、「新たな仮説」と「新説」の発表を行った。

さらに、「四 「定使野地区」^{じよつかいの}の流路変遷」の章において、② 「定使野橋」から「宮野橋」までの区間と、

「新栄橋」から「白鷺橋」北北西約150mまでの区間の流路変遷について、「新発見」の発表を行った。

最後に、「今後の課題」としては、元禄十四年（一七〇一）五月十四日以前の千間堀の「落とし先（流末）」としての「埋堀」の流路を完全に「復元」するために、以下の「2点」の解明が必要となる。

③ 元禄十四年（一七〇一）五月十四日以前の千間堀の「2ヶ所」の「伏越」の位置の解明。

④ 「上流部が接続（分流）していない」という点も含めた「伏

越」付近の「埋堀」の流路の解明。

なお、「埋堀」の流路の解明は、元禄十四年（一七〇一）五月十四日以前の千間堀の「落とし先（流末）」としての流路の解明と、同様の意義を持つとの「仮説」を出発点とする。

謝辞

二〇一五年四月二十三日、NPO法人越谷市郷土研究会・「河川史研究倶楽部（現・地誌研究倶楽部）」における「講演会」に参加され、配布された資料に目を通された同会「会員」の加藤 幸一氏は、翌年の二〇一六年二月、「越谷市文化芸術祭」において、「越谷市内を流れる明治初期の千間堀」⁽¹⁷⁾と題した発表をされた。

加藤氏による同発表においては、筆者「新発見」である「定使野地区」^{じょうつかいの}の流路変遷の記載がある。

また、加藤氏の同発表においては、二〇一四年六月二十六日、同会・「同倶楽部」における「講演会」の配布資料として筆者が作成した「復元図」⁽¹⁸⁾を基にして、加藤氏が作成した「復元図」の記載もある。

以上の筆者の「新発見」と「復元図」⁽¹⁸⁾に関する記載を頂いた加藤氏へは、この場をお借りして御礼申し上げます。

注

(1) 文政十三年（一八三〇）成立

(1963) 『新編武蔵風土記稿』「第三期」第十卷、雄山閣

(2) (1973) 『越谷市史三史料一』越谷市役所、

五四九頁

(表紙)

「字千間堀旧記調書」

千間堀旧記

一私共村々組合千間堀大吉村地内葛西用水伏越埋樋往古横壱間坎式ヶ所ニ御座候処、百三拾九ヶ年以前元禄十二丑年中右埋樋式ヶ所共御広ヶ被成下置、井筋之儀も大泊・舟渡両堰取払、尚亦下千間堀花田古川に御堀替被成下置度段 御奉行所様に私共村々方奉出訴候処、相手村々ニ而茂夫々返答書致し候二付、御吟味之上同十三辰年五月中御代官古川武兵衛様御手代小幡重郎右衛門様・大岡喜右衛門様御手代鈴木久次郎様論所為地改被成御越、水盛御様被遊候処、大泊村高場之田面より須賀掘之定水四寸余高ク御座候二付、其旨并井筋水道御見分之上夫々口書差上御

帰府、御奉行様ニ而再応御吟味之上、同十四巳年五月十四日於、御評定所様両堰取払、大吉村地内伏越樋内法四尺五寸横式間長式拾式間二式ケ所共御入用を以御普請被、仰付、猶亦下千間堀抜被 仰付段御裁許相済、其後九拾壹ヶ年已前延享四卯年中船渡村堰之儀及出入其節方用水中築留候筈熟談仕、且亦大泊堰之儀ハ四拾ヶ年以前寛政十年是又及出入 根岸肥前守様於 御奉行所再応御吟味之上、無証抛申争迄ハ難御取用最寄村々被召出、相手村同様築来候

〔後略〕

(傍線・太字・筆者加筆)

(3) ①安政五年(一八五八)

「安政5年調 葛西用水々路の古図」

(船橋市西図書館蔵)

②不明「江戸川筋の図」(船橋市西図書館蔵)

③江戸期「絵図」(越谷市立図書館蔵・資料番号26)

(加藤 幸一氏解説)

(4) 「河川激甚災害対策特別緊急事業」の採択を受け、「伏越逆転工事」が行われた。

工期(一九八三年10月31日～一九八五年3月25日)

山崎 隆蔵・杉江 啓二・浜田 久典(一九八四)
「新方川激特、伏越逆転工事」

『土木技術』三十九卷八号、九七～一〇二頁

(5) 明治二十二年(一八八九)四月一日、旧・大吉村は旧・

北川崎村、旧・向畑村、旧・大松村、旧・大杉村、旧・

弥十郎村、旧船渡村と合併後に旧・新方村になり、旧・

増林村は旧・増森村、旧・中島村、旧・花田村、旧・

東小林村と合併後に旧・増林村になった。

渡辺 隆喜(一九七七)『越谷市史 二 通史下』

越谷市役所、一七四～一七八頁

(6) (一九八七)

『新方川 河川激甚災害対策特別緊急事業概要』

埼玉県中川・綾瀬川総合治水事務所

(7) 吉本富男(一九七七)『越谷市史 二 通史下』

越谷市役所、五六四頁

〔前略〕大正十四年県会の可決を経、国庫補助をうけて昭和二年に工を起し、同八年十一月に竣工した。

〔中略〕ちなみに増森新田(旧・増森村)から元荒川に落されていた千間堀落口は、この時期模様替えとなり、中島の籠場から中川に落されるようになった。

(傍線・太字・() 内の文字は筆者加筆)

(8) 越谷市史編さん室編 (一九八〇)

『越谷ふるさと散歩(下)』

越谷市役所市史編さん室、一〇〇頁

「前略」「千間堀旧記」によると、「中略」当時(元禄十二年(一六九九))千間堀は用排水兼用の堀であり、かつ葛西用水路の下をくぐる埋樋から増林の水田地に落とされていたようである。「中略」

これが元禄十二年千間堀上流村々の訴願により、逆川の伏越樋が切り広げられるとともに、その流末は花田古川(荒川河道跡)の先端部まで延長された。その後花田古川が新田に開発されるにともない流路はさらに延長され増林(旧・増森村)地先の元荒川に落とされて排水機能の充実がはかられた。「後略」

(傍線・太字・() 内の文字は筆者加筆)

(9) 吉本富男 (一九七七) 『越谷市史 二 通史下』

越谷市役所、一四三頁

(10) 上流部の村々の「悪水(排水)」を、下流部の村の水

田地に「落とされていた」という状態を、下流部の村が黙って放置していたとは考えにくい。

安政六年(一八五九)七月、正に、同地で発生した

「逆川切割り騒動」を参照して頂きたい。

「万延元年(一八六〇)三月

大吉村堤防切割出入吟味願」

(「大吉染谷家文書」市史編さん室蔵)

(一九七三) 『越谷市史 三 史料一』 越谷市役所、

八〇三〜八〇九頁

(11) 尾川 芳男 (二〇一四) 「増林に残る庚申講」

『古志賀谷』第十七号、

NPO法人越谷市郷土研究会、六五〜六七頁

(12) 昭和八年(一九三三)十一月以降の千間堀の「落とし

先(流末)」について、その直前まで旧・増森村から元荒川に落されていたものを、旧・中島村の中川に落されるようになったと記載している先行研究は、

① 『越谷市史 二 通史下』 ※注 (7)

② 『越谷ふるさと散歩(下)』 ※注 (8)

(元荒川についてのみ記載している)

③ 竹内理三編 (一九八〇)

『角川日本地名大辞典 十一 埼玉県』

角川書店、六四四頁

の3点である。

また、千間堀が旧・増森村から元荒川に落さされていた時期の特定を推測することを可能とする以下の史料が存在する。

④江沢昭融『大沢町古馬管』

(一九七二)『越谷市史 四 史料二』

越谷市役所、一五九・一六〇頁

百二 増森新田門樋之事

一増森・増林・花田・大沢四ヶ村組合字増森新田(旧・

増森村)清学院向門樋之義、是迄八尺四方之処、年

限等不相保候ニ付、文政八酉年(一八二五)中長四

間横三尺高三尺之^二塚樋ニ模様替いたし候、「中略」天

保十二丑年(一八四一)取払ニ相成申候、

(傍線・太字・^二)内の文字は筆者加筆)

ゆえに筆者は、昭和八年(一九三三)十一月以降の千間堀の「落とし先(流末)」についても、『大沢町古馬管』の記載から、文政八年(一八二五)以前に、既に増森新田(旧・増森村)から元荒川に落とされてきたことが推定可能ながら、文政十三年(一八三〇)成立の『新編武蔵風土記稿』の刊行以前に、史料上では

確実に旧・中島村の大落古利根川に落とされていたという「新説」を、二〇一四年十一月「第46回越谷市市民文化祭」において発表した。

その事実を証明する史料を、以下に掲載する。

①文政十三年(一八三〇)成立

『新編武蔵風土記稿』増森村の項

「千間堀 村の中程を流る、岩槻領諸村の悪水路

にて、末は古利根川に入」

②安政五年(一八五八)

「安政5年調 葛西用水々路の古図」

(船橋市西図書館蔵)

「旧・中島村で古利根川に合流」

③江戸期「絵図」(越谷市立図書館蔵・資料番号23)

(加藤 幸一氏解説)

「旧・中島村で古利根川に合流」

④江戸期「絵図」(越谷市立図書館蔵・資料番号26)

(加藤 幸一氏解説)

「旧・中島村で古利根川に合流」

⑤明治十三年(一八八〇)測量「迅速測図」

「旧・中島村で古利根川に合流」

⑥ 明治十五年（一八八二）成立『武蔵国郡村誌』

「増森新田（旧・増森村）の千間堀から

さらに下流部となる位置に、

新田橋（現・新田橋）、中台橋（現・昭和橋）

が存在していた。

(13) 農研機構農業環境変動研究センター

「歴史的農業環境閲覧システム」

<https://habs.dc.affrc.go.jp/index.html>

※ 時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」

埼玉大学教育学部 谷 謙二（人文地理学研究室）

<http://ktgis.net/kjmapw/index.html>

においても、閲覧可能である。

(14) 二〇二〇年四月二十三日、筆者の「新発見」である。

(15) 時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」

埼玉大学教育学部 谷 謙二（人文地理学研究室）

<http://ktgis.net/kjmapw/index.html>

(16) 越谷市市史編さん室編（一九七〇）

『越谷市民俗資料』越谷市市史編さん室、四七頁

(17) 加藤 幸一（二〇一六）

「越谷市内を流れる明治初期の千間堀」

http://koshigayahistory.org/160228_bgs_kk.pdf

(18) 加藤 幸一氏が解読された

「是より千間堀」と記載のある江戸時代の作成と

推定される絵図（越谷市立図書館蔵）を基に、

筆者が「迅速測図」を用いて、

① 「是より千間堀」の「是」に相当する「堰所」跡

② 千間堀へと続く「流路」

③ その流路に架かっていた「石橋」跡等

の地点を「復元図」として作成した。

※ 追記

二〇二〇年五月七日に、筆者は、

※注（3）（12）安政五年（一八五八）

「安政5年調 葛西用水々路の古図」

（船橋市西図書館蔵）に、

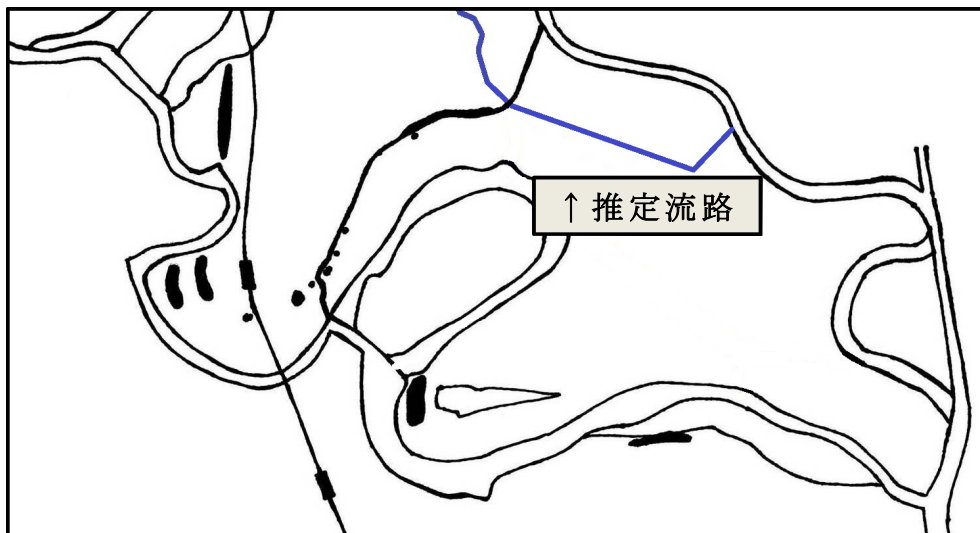
「恩間新田三ツ俣より千間堀」

という記載があることを「発見」した。

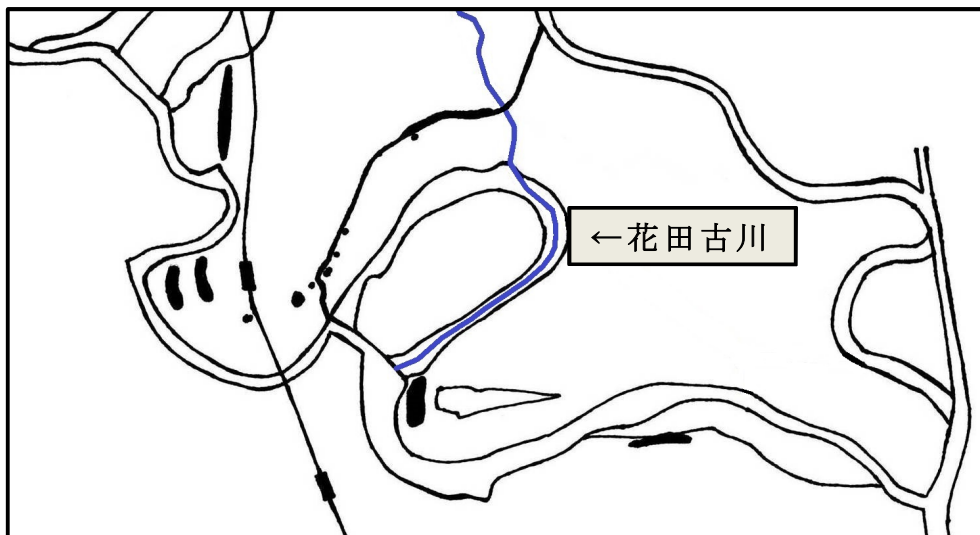
つまり、千間堀は注（18）「堰所」からではなく、

「恩間新田（旧・恩間村）の三ツ俣」から始まると認

識されていた史料も、別に存在することが判明した。



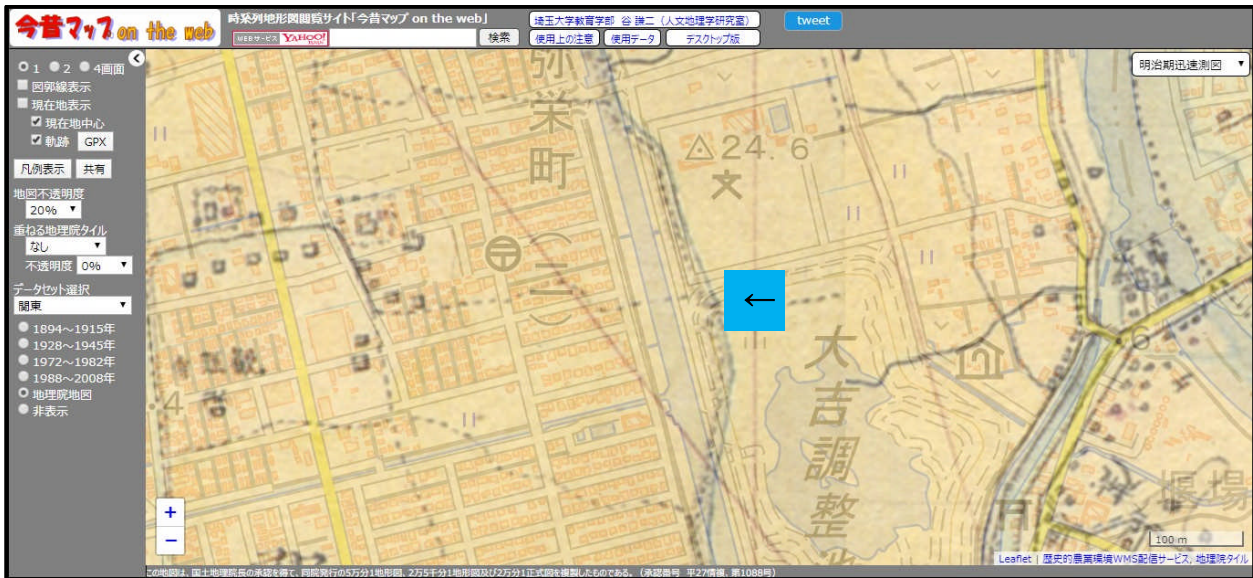
↑ 元禄十四年（1701）五月十四日以前、
「(大落) 吉利根川」に落とされていた。



↑ 元禄十四年（1701）五月十四日以降、
「花田古川」に落とされた。



↑ 文政十三年（1830）以前には、
当時の「(大落) 吉利根川」に落とされていた。



↑ 「今昔マップ on the web」(注(15))より加筆・転載
「明治期迅速測図」と
「地理院地図(地図不透明度20%)」との
埼玉県越谷市大字**大吉**地区における
「新方川」の流路の「位置環境」の比較。

↓ 「今昔マップ on the web」(注(15))より加筆・転載
「明治期迅速測図」と
「地理院地図(地図不透明度40%)」との
埼玉県越谷市大字**増林**地区における
「新方川」の流路の「位置環境」の比較。

